

e ポートフォリオを活用した授業実践 - ミネソタ大学訪問調査報告 -

Educational Practice by using ePortfolio
- A Report from visiting University of Minnesota -

宮崎 誠*¹

松葉 龍一*²

Makoto MIYAZAKI Ryuichi MATSUBA

法政大学*¹

熊本大学*²

Hosei University Kumamoto University

＜あらまし＞ 本稿は、ミネソタ大学ダルースキャンパスを筆者らが訪問調査した報告である。15年前より一貫してポートフォリオの活用を進めてきた関係者らのインタビューにより、e ポートフォリオを活用した授業実践のために様々な支援体制が構築されていること、さらにキャンパスにおける学習目標と学生の学習成果を紐付けるための枠組みの構築が進められていることがわかった。

＜キーワード＞ e ポートフォリオ, Sakai, OSP, 授業設計, コミュニティ

1. はじめに

オープンソースのe ポートフォリオ・システムとして高等教育機関に導入実績のある代表的なものにMoodleと連携が可能なmaharaやSNSとして機能するElgg、そして、現在Sakai コミュニティで開発が進められているSakai CLEのe ポートフォリオ・ツールOSP (Open Source Portfolio) 等がある。

オープンソースの他、商用のベンダー製のe ポートフォリオ・システムを含め、導入したものの「e ポートフォリオを作成することの効果がよく分からない」、「授業でどのように活用すればよいかわからない」等の理由で利用が進まないケースも少なくない。

筆者らの所属する大学では、Sakai CLE を使っており、OSP によるe ポートフォリオ・システムの導入も検討してきた。OSP は、ミネソタ大学ダルースキャンパス (UMD) がプログラムをオープンソースとして提供し、それを元に開発が始まったシステムである。

本稿は、ソースコードを提供するよりも前から一貫してe ポートフォリオの活用を進めてきた関係者らを訪ね、2011年6月に筆者らがUMDを訪問調査した報告である。インタビューにより、e ポートフォリオを大学に導入する際の戦略、e ポートフォリオを活用した授業実践手法、また、これらを実現するために必要な支援体制について示唆を得ようとするものである。

2. e ポートフォリオの基本信念

15年前からUMDにおけるe ポートフォリオの基本信念は変わっていない[1]。

1. 学生は、自身のe ポートフォリオを集めるだけでなく、それら情報を管理することに責任を持つ。
2. 学生は、ポートフォリオの潜在的な閲覧者と共有するために各自の情報（テキストファイル、デジタル画像、ビデオ、音声）を選択することによって、責任を持ってデータを管理することを学ぶ。
3. 大学が卒業後も生涯ポートフォリオにアクセスすることを認めることで、学生が学びの生涯の記録を作る励みとなる。
4. 学生は、大学にいる時だけでなく定期的に学びを振り返ることが強く求められる。
5. e ポートフォリオを使った学習者の実践コミュニティへの参加を通じて、ソーシャルな実践の中で新しい知識を構築し、管理する励みとなる。

これらの5つの基本信念は、Sakai OSPの開発される元となったUMDのe ポートフォリオ・システムの設計に反映されている。また、新任教員の研修や学生オリエンテーション、ライティングの授業でもこの思想は、教員、学生ともに共有されている。e ポートフォリオはただのデータでしかなく、それを使ってどうやって学びに活用するのかが重要である。

3. OSeP の概要

OSeP (Open Source ePortfolio) と名付けられた UMD の e ポートフォリオ・システムは、現在は、Sakai OSP とは別のシステムである。UMD が OSP から独自システムとして OSeP を開発した理由の一つは、現在の OSP との設計思想の相違点と言う。OSP がユーザ中心の設計であるのに対し、OSeP はデータ中心の設計である。

OSeP には、ジェネラルとコミュニティの大きく 2 つの概念がある。ジェネラルは、個々でデータを集めておく場所であり、コミュニティは、集めたデータを使って、学習のエビデンスを作るソーシャル・ネットワークを使ったサイトである。

OSeP へのデータの inputs は、ファイルをアップロードする方法や予め用意されたテンプレートを使う方法がある。テンプレートには、ループリックを用意することもできる。また、メールを使って、テキストや画像等を入力することも可能である。データには、タグを付けることができ、大量に蓄積したデータから目的のものを探したり、整理するのに役に立つ。その他にも、SIS (Student Information System) と連携して自動的に情報を取得することができる。

Jython で開発されており、オープンソースのシステムである。

5. ライティング科目における e ポートフォリオの活用

実際に授業で e ポートフォリオを使った学習を実践するには、これまで多くの苦労があった。Writing Studies 学科では、2001 年秋からライティングの授業などで e ポートフォリオの作成を通じた学びを実践してきた。実に 10 年である。e ポートフォリオを活用して授業を行う目標は、

- ・ 学生が情報の所有者として責任を持つこと
 - ・ 情報の中から選択して公開できることによって、学生が情報を管理すること
 - ・ 学生が生涯にわたって学習の記録を作成することができること
 - ・ 学生が学習の振り返りができること
- である。

初年度は、オリエンテーションの週に学科教員の研修を行い、授業の設計の、ハンドアウトやチェックシートを用意していたが、最初から順風満帆とはいかなかった。

新入生には、学習を記録していくこと自体の利益を理解できなかったし、学年が上がるとほとんどの学生が e ポートフォリオに記録しなくなっていた。また、学生は試験の点数や単位にばかり気を取られがちであった。

教員にとっては、e ポートフォリオを使って教えることに時間がかかり過ぎていた。また、e ポートフォリオを活用しての評価や、e ポートフォリオの管理が難しすぎた。

そこで、事務のサポート体制を作り、学科や授業で先導して使ってくれる教員やスタッフから 1 人を選抜して、問題や改善点などについてコミュニケーションをとれるようにするなど、コミュニティの構築に努めた。また、学生に対しては、できるだけ早い時期に e ポートフォリオを紹介し、最終試験のほんの一部に e ポートフォリオを使うなど戦略的に導入していった。授業外でも e ポートフォリオに関してサポートが受けられるように e ポートフォリオ専属のチューターが対応するようにした。また、授業のループリック作成をサポートする e ポートフォリオ・センターを設けるなど、授業実践の体制が整うに連れて、e ポートフォリオの活用が広がっていった。

6. おわりに

授業への導入から始まった e ポートフォリオは、UMD の全体の組織評価活動にも導入が進められている。現在、キャンパス全体の学習目標を策定し、キャンパスレベルで得られる学習成果物、科目レベルで得られる学習成果物が構造的にリンクして授業が設計できる枠組みが準備されている。UMD の学習目標と個々の学習成果物が e ポートフォリオとして整理される枠組みである。

UMD の教授陣は、e ポートフォリオについて「e ポートフォリオは、最も進んでいる初めての生涯学習ツール」だと教えてくれた。UMD の e ポートフォリオ導入や事業の事例は、これから e ポートフォリオを検討する大学などでも大いに参考となるであろう。

参考文献

- [1] Paul Treuer and Jill D. Jenson, “Electronic Portfolios Need Standards to Thrive”, <http://net.educause.edu/ir/library/pdf/eqm0324.pdf> (2011 年 7 月 26 日閲覧)